

# “但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

## 第8回「洋種交配②」

ショートホーンやデボン種は但馬牛の改良に何ら影響を及ぼさなかったと言われていますが、種雄牛が改良に重要な枠割りを担っていることを広く認識させるきっかけを作った効果は大きかったと思います。

1885年に兵庫県は「種牝牛取締規則」を定め、種雄牛として供用できる年齢を満2歳以上に制限しました。この頃まで、雄牛は子牛を産ませる道具に過ぎず、種付けは家畜商が独占し、雄牛を選ぶことはありませんでした。また、美方郡では生まれた雄子牛を鳥取で育成し、若雄になると連れ帰り、春から秋に交配に使って、その後売却することが常態化していました。これでは子牛が生まれた頃には父牛は売られていて、どんな父牛の子か判りません。まずこれを是正しようとなりました。

そして1892年には「種雄牛改良規程」を定めて、町村が種雄牛の管理・供用を行い、子牛の父親が確実に判るようにしました。

一方、明治政府は1900年に「種牛改良調査会」を設置し、我が国の牛改良について諮問しました。調査会は、“乳”、“役”、“肉”の3用途に使う兼用種と“乳”専用種の増殖を図るべきとして、輸入すべき品種にシンメンタールとエアシャー種を挙げ、兼用種の増殖にあたっては「在来和種の形質や能力的特質を良く見極め、精選した雌牛に洋種の雄を交配すべき」と答申しました。そして政府は輸入すべき品種にブラウンスイス種を加え、在来和種の改良方向として示しました。

美方郡は政府の新たな方針にいち早く反応しました。美方郡畜産会の初代会長・北村元吉氏は、東京大学、北海道大学、農商務省の意見を訊き、三里塚御料牧場を視察し、ブラウンスイス種が但馬牛の改良資源に有用だと判断して各所に働きかけました。

そして1902年、兵庫県は改良方針を定め、但馬・丹波地域は“役肉兼用種”を目指してブラウンスイス種で、淡路・播磨地域は“役乳兼用種”を目指してエアシャー種で改良することにしました。

“役乳兼用種”と言うのはイメージしにくいですが、かつて酪農を担当していた頃、三原郡酪農農業協同組合で、斑模様で大きな乳房をぶら下げた牛が田んぼを鋤いている写真を見た記憶があります。いつ頃の写真か定かではありませんが、淡路では乳牛を農耕に使っていた歴史があるようです。

ともあれ、但馬牛の改良にブラウンスイス種を用いることになり、1903年にスイスからリーナス号が美方郡に到着したのを皮切りに、但馬・丹波地域にブラウンスイス種雄牛が順次配置されました。

松岡大臣訓示事件で服部知事が名指しした新山荘輔御料牧場長は、1905年に但馬を訪れています。「但馬牛物語」には、『場長の来但がブラウン雑種に熱を上げていた但馬の火に、油を注いだ』とあります。しかし、別表に美方郡における飼育状況を示しますが、その頃、雑種生産は低調で、新山場長が来但した2年後の1907年から急増しました。政府の改良方針にブラウンスイス種が加わったのは、御料牧場が飼っていたことによるとも言われ、新山場長は1889年にホルスタイン種を導入し、在来和種との交雑牛を造った人ですが、前述のようにブラウンスイス種の導入は北村会長が進めたようです。

表 美方郡おける牛飼育状況

年	飼育頭数									子牛生産頭数		
	但馬牛			ブラウン雑種			ブラウンスイス種			但馬牛	ブラウン雑種	計
	雌	雄	計	雌	雄	計	雌	雄	計			
1903年	2,975	137	3,112	0	0	0	0	1	1	1,822	0	1,822
1904年	2,736	115	2,851	3	1	4	0	1	1	1,933	8	1,941
1905年	2,789	230	3,019	4	0	4	0	1	1	1,559	5	1,564
1906年	2,887	166	3,053	2	1	3	0	1	1	1,536	7	1,543
1907年	3,139	133	3,272	43	6	49	0	2	2	2,010	108	2,118
1908年	3,131	71	3,202	71	14	85	1	6	7	2,070	250	2,320
1909年	3,221	43	3,264	66	16	82	1	5	6	1,512	700	2,212
1910年	3,404	53	3,457	187	29	216	0	0	0	1,284	856	2,140
1911年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1912年	3,174	30	3,204	113	1	114	0	0	0	2,164	62	2,226
1913年	3,059	29	3,088	1	0	1	0	0	0	2,198	0	2,198
1914年	3,017	295	3,312	33	2	35	0	0	0	2,299	14	2,313
1915年	3,029	294	3,323	25	0	25	0	0	0	2,218	10	2,228
1916年	3,209	197	3,406	21	0	21	0	0	0	2,035	2	2,037

「兵庫の和牛」は、牛飼育頭数の減少や日露戦争後の好景気で牛価が上がり、県も雑種生産を奨励し、県内外の共進会等で雑種が上位を占めたことから“雑種＝改良”という風潮が広がったとしています。

雑種の価格上昇は“ブラウンブーム”と言われる投機的な動きになりましたが、このブームは僅か4年で収束し、夜逃げ・倒産した家畜商は300戸という悲惨な結果を残しました。（次号につづく）